

平成 22 年 5 月 15 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006 ～ 2009

課題番号：18530472

研究課題名（和文） キリスト教福祉における社会福祉援助の価値に関する調査研究

研究課題名（英文） The Survey Study on Value of Social Work in Christian Social Welfare

研究代表者

滝口 真 (TAKIGUCHI MAKOTO)

西九州大学・健康福祉学部・教授

研究者番号：20258635

研究成果の概要（和文）：キリスト教福祉における社会福祉援助の価値を明らかにするため、日本キリスト教社会福祉学会員に対してキリスト教社会福祉の独自性を問うアンケート調査を実施した。その結果、「聖書」（57名；14.8%）、「祈り」（39名；10.2%）、「個人の尊厳」（37名；9.6%）の順であった。また、キリスト教社会福祉研究者及びクリスチャンソーシャルワーカーら10名に対してインタビュー調査を実施し、キリスト教社会福祉援助の価値を検討し、援助概念図を示し可視化した。

研究成果の概要（英文）：To clarify the value of social work in the Christianity social welfare, the questionnaire survey that asked the Japanese Christianity social welfare science society member the originality of Christianity social welfare was executed. As a result, it was the order of "Bible" (57 people; 14.8%), "Prayer" (39 people; 10.2%), and "Personal dignity" (37 people; 9.6%). Showing moreover, executing interview investigation to ten people such as Christianity social welfare researchers and Christian social workers, examining value of Christianity social work, and visible having made of Christianity social work concept chart

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,600,000	0	1,600,000
2007年度	300,000	90,000	390,000
2008年度	300,000	90,000	390,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	2,700,000	330,000	3,030,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：ソーシャルワーク、キリスト教、キリスト教社会福祉、援助観、社会福祉思想、社会福祉の価値、質的研究法、ワードマイナー

## 様式 C-19

### 科学研究費補助金研究成果報告書

#### 1. 研究開始当初の背景

(1) 柴田(1988)・岡村(1988)・門脇 (1997)らの報告からも社会福祉発達史において「キリスト教思想」が大きな影響を与えた事実は明らかである。また、わが国においても福祉措置制度化以前の社会福祉実践の主たる実施者は糸賀一雄、石井十次、山室軍平などクリスチャン・ソーシャルワーカーらが慈善事業として近代以前のソーシャルワークを担ってきた。これらの福祉実践者の足跡を検証しつつ、現代のキリスト教社会福祉事業との比較検討は学術的にも意義がある。

(2) 日本キリスト教社会福祉学会においても歴史研究としてのキリスト教福祉の報告と現代のキリスト教主義福祉施設の実態は個々に報告がなされ、これらを融合した総合的考察は皆無である。その点で本研究の獨創性が指摘できよう。また、本研究によるキリスト教思想を基盤とした価値・倫理・哲学は、アメリカの社会福祉学者であり神父であった Biestek, F.P. がケースワーク過程で明らかにした「バイスティックの7原則」に見られるように、現代のソーシャルワークにおいても有益な示唆を与えるものと推察できる点で研究としての意義が確認できよう。

(2) 日本キリスト教社会福祉学会が1996年に全国調査を実施して依頼、既に10年目以上を迎えるが、その間、キリスト教社会福祉関係の実態調査は実施されていない。周知の通り、社会福祉界はここ10年の間に措置制度から社会保険方式による契約制度に改まる大きな転換が迫られた。このことから再調査の必要性が指摘でき、本研究の獨創性と特色が示されるといえよう。

#### 2. 研究の目的

(1) 聖書におけるキリスト教社会福祉援助

の教義解釈を行い検討する。

(2) キリスト教社会福祉の独自性を明らかにするため調査票作成において、内容的妥当性の検討を行う。

(3) 上記(2)に関して、調査票の精査を高める。

(4) キリスト教社会福祉の独自性・コアを明らかにするため全国調査を通して実態を把握する。

(5) キリスト教社会福祉の独自性・コアの調査分析を通して、キリスト教社会福祉の価値を検討する。

(6) キリスト教社会福祉の社会福祉援助の価値を可視化する。

#### 3. 研究の方法

(1) 聖書におけるキリスト教社会福祉援助の教義解釈を行うため、新訳聖書学と実践神学専攻の神学者2名にキリスト教からの教義理解について継続的にヒアリングを実施した。

(2) 上記(1)の検討のため先行研究の検討を実施した。

(3) キリスト教社会福祉の独自性を明らかにするため調査票作成において、キリスト教社会福祉研究者及びクリスチャンソーシャルワーカー10名に対してインタビュー調査を実施し、内容的妥当性の検討を行った。

(4) 上記(3)に関して、量的調査における信頼性を確保するためにスーパービジョンを受け、調査票の精査を高めた。

(5) キリスト教社会福祉の独自性・コアを明らかにするため日本キリスト教社会福祉学会に所属する学会員442名(クリスチャン研究者及びクリスチャンソーシャルワーカーら)に対して郵送法による全国調査を実施した。

調査の分析においては、WordMiner(日本電子計算株式会社)を用いた。

(6) キリスト教社会福祉の独自性・コアの調査分析を通して、キリスト教社会福祉の価値を検討し、キリスト教社会福祉の社会福祉援助の価値を可視化するため、キリスト教社会福祉研究者及びクリスチャンソーシャルワーカー10名に対してインタビュー調査を実施し、内容的妥当性の検討を行った。

#### 4. 研究成果

(1) キリスト教社会福祉の聖書教義について多くのキリスト教社会福祉研究者及びクリスチャンソーシャルワーカーらがキリスト教社会福祉を意味づける聖句である「マタイ25章40節」の教義を検討した。

マタイ25:40については日本語訳では主語が略されているが、英語及びドイツ語にお

いては、貴方（弟子）が明示されており、これが本聖句の主語（主体）と理解される。

I nasmuchas ye have done it unto one of the least of those my brethren ye have done it unto meer

Was ihr getan habt einem unter diesen meinen geringsten brudern, das habt ihr mir getan.

また、ギリシャ語においては、ye didと示されている。

本節の解釈としては、「私の兄弟であるこの最も小さい者のひとりに（あなたが）したのは、すなわち（あなたが）わたしにしたのである。」と諸外国の聖書では示されている。これを社会福祉の視点から見ると、主体（働きかける者）は弟子（援助者）で客体（働きかけられる者）がこの小さい者（利用者）であると理解できよう。

よって、客体は「この最も小さい者のひとり」と理解できることから、先行研究で高森の主張する「主体は『その最も小さな者、それはイエスご自身であり、客体もまた、わたしの兄弟であるこの最も小さく苦しみの中に置かれている人々である』」には解釈として混乱が見られると考えられる。

同時に問題提起した高森自身へのインタビュー調査からも「小さき者＝主イエスであり、福祉サービス利用者に主イエスの存在を重ね合わす精神的理解は心情的にあったとしても、聖書的文法上の理解においては、主体（働きかける者）は弟子（援助者）で客体（働きかけられる者）がこの小さい者（利用者）であるといえる。」との主張であり、先の主体と客体とを同義に捉える理解は高森自身の発言からも否であることが明らかとなった。

加えて、本聖句を「新共同約 新約聖書注

解Ⅰ（1991）及び「新共同約 新約聖書略解」（2000）[共に日本基督教団出版局]を参照すると、「著者にとって、終末において祝福を受けるか滅びを宣告されるかの決定に関する《わたしの兄弟であるこの最も小さい者》とは、通常の経済的貧困者や困窮者でなく、実は福音の伝道者を意味したことである。」と示されている。

「弟子たるものは自分を低くし仕える者とならねばならないのであるから（マタイ 23：12）、《最も小さい者》とはキリスト者の模範である。この物語で言えば、彼らは投獄され飢え渴きみすぼらしい身なりをし定住するところなき生活が続けながら福音を伝えたのであって、著者は彼らの姿にキリスト者の思想を見たのである。」と解説している。

すなわち、これらのコメントからは、「援助者たるものは自分を低くし、（利用者）に仕える者となることが求められる」とも解釈でき、本聖句は、当時の困窮のなかにあっても信仰によって立つ伝道者のように、利用者に対して謙虚で献身的に援助にあたるよう諭す援助者自身への自己覚知を促進する書としての性質を有するとも考えられよう。

## (2)キリスト教社会福祉の独自性について

日本キリスト教社会福祉学会員 442 名、得られた有効データは計 143 名（有効回答率は 32.4%）を対象に郵送法によるアンケート調査を 2007 年 10 月 5 日～12 月 7 日に実施した。キリスト教社会福祉の中心となるもの「コア」について問うたところ、「聖書」と回答した者が最も多く 57 名（14.8%）であった。次いで「祈り」39 名（10.2%）、「個人の尊厳」37 名（9.6%）、「平和」31 名（8.1%）、「社会正義」18 名（4.7%）、「隣人愛」15 名（3.9%）、「十字架」14 名（3.6%）、「愛」11 名（2.9%）、「福音」と「奉仕」が各 6 名（各 1.6%）であった。「個人の尊厳」、「平和」、「社

会正義」、「隣人愛」、「愛」、「奉仕」は社会福祉、ソーシャルワークの重要項目としてキリスト教以外でも共通した認識として受け止められよう。しかし、「聖書」、「祈り」、「十字架」、「福音」については、キリスト教社会福祉の独自性として捉えることができよう。「聖書」がキリスト教社会福祉の独自性・コアとする理由としては、「キリストのことばの中に、キリスト者として、援助としての福音的価値観の源が記されているから」、「支援者としての自分の生き方の指針となるから」等と示されていた。

「祈り」と示す理由に関しては、「他人（クライアント）のために祈ることは、福祉の原点と考えるから」、「神様との応答であり、自己覚知を神様に正して行うことができる為」等、対利用者への祈りと対イエスへの祈りの大きく二分される現状がうかがえた。「十字架」については、「罪を赦された中での自由としての実践理解の原点」、「十字架の贖罪の信仰こそ社会福祉の原動力」等とその理由が示されており、「福音」においては、「キリスト教福祉は福音（良い知らせ）を社会的に実践を通して体現するものだから」等と示しており、ソーシャルワーク過程においてキリスト教の教えを通して事象を客体化する作用も含まれるものと考えられよう。

また、分析の結果、プロテスタントとカトリックの回答に大きなコア（用語）の差はなかったが、「エキメニカルのため」、「ミッション」、「協働」、「行い」、「罪」、「実現」、「神の国」、「平和の創造」、「命の尊厳」、「倫理」の10項目（各人1項目ずつ回答）についてはカトリック信徒のみに出現した用語であった。

また、キリスト教社会福祉のコア（用語）を選定した理由としての高頻度語については、「神」47名（32.9%）、「キリスト教」44

名（30.8%）、「キリスト教社会福祉」35名（24.5%）、「愛」31名（21.7%）、「実践」30名（21.7%）、「社会福祉」27名（18.9%）、「人間」27名（18.9%）、「福祉」26名（18.2%）、「聖書」25名（17.5%）、「祈り」22名（15.4%）（上位10項目）の順であった。このことから、キリスト教社会福祉の「コア」とその「理由」の双方に共通して出現頻度が高い用語として、「聖書」と「祈り」及び「愛」の3用語を選択した者が学会員に多いことが明らかとなった。

これに関連して、コアとして最も多かった「聖書」の選定理由の単語としては、「聖書」、「キリスト教」、「キリスト教社会福祉」、「ことば」、「社会福祉」の単語が示された。また、「祈り」の選定理由としては、「祈り」、「実践」、「神」、「キリスト」、「基本」の単語が示されていた。さらに、「愛」の選定理由としては、「愛」、「教え」、「わたし」、「最も」、「共生」などの単語が示された。このことから、「聖書」と「祈り」には共通した「キリスト」の単語が示され、「愛」においては「教え」、「わたし」、「共生」などとする特徴的な単語が示された。このことから、キリスト教社会福祉の独自性と使命の一つとして、「神のことばである聖書とその祈りを通して、キリスト教福祉実践の基本を神と自らに問い、神から受けた大いなる愛を隣人への愛としてわたし（援助者）を通して教えられ共生（利用者や地域社会）のあり方へと転化していく一切のプロセス」が存在すると考えられよう。

### (3)キリスト教社会福祉援助概念について

キリスト教福祉の援助構造には、「聖書的・普遍的倫理」である価値としての理念が上位に位置し、縦軸の下位に「援助者」として神に召し仕える者となる謙虚で謙遜な専門職としての姿勢が求められる。同時に「スピリチュアル・状況倫理」に対応する形で、横軸に平行的位置からの「社会福祉の知識・技術・社会資源」が的確にアプローチされる必要がある。二つの軸が交差する「接点A」（利用者）を常に援助の中心的存在に位置し、神と援助者及びスピリチュアリティと社会福祉知識・技術・社会資源が的確に循環する

総体がキリスト教福祉におけるソーシャルワーク実践として試論できよう。

この場合、「スピリチュアリティ・状況倫理」は、「社会福祉の知識・技術・社会資源」のあり方や現状の社会的環境によって左右されるものである。しかし、「聖書的・普遍的倫理」においては、いかなる社会的・環境的・政治的状况下においても、普遍的なキリスト教福祉の倫理として位置するものである。特に二次元の交差点「A」（利用者）において、援助者が神とのレスポンスを意図的に確認する霊的作業が求められよう。

特に本研究のテーマからは、キリスト教福祉の先達が残した足跡を振り返り、その実践の中からキリストの愛によるソーシャルワークの価値とスピリチュアリティ〈霊（性）〉を再検討する必要がある。再度、ソーシャルワークと宗教の関係性の捉え直しを通して、利用者のスピリチュアルを尊重したキリスト教社会福祉援助の検討が求められよう。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕計 5 件）

- ① 滝口 真、兼信憲吾、古賀俊彦、ソーシャルワークの教育機能における価値・倫理観についての一考察—生活相談員による現任教育の事例を通して—、キリスト教社会福祉学研究、査読有、第 42 号、2010、125-135
- ② 滝口 真、ソーシャルワークにおけるキリスト教福祉の意義について—聖書に基づく人間観とスピリチュアリティの視点より—、日本看護福祉学会誌、査読有、第 13 巻 1 号、2007、33-43
- ③ 滝口 真、ソーシャルワークの価値体系についての考察—価値の科学化を中心として—、日本看護福祉学会誌、査読有、第 11 巻 2 号、2006、124-135

〔学会発表〕（計 15 件）

- ① 滝口 真、キリスト教社会福祉の独自性と使命に関する考察（1）—キリスト教社会福祉学会員意識調査より—、日本キリ

スト教社会福祉学会第 50 回記念大会、2009 年 6 月、ルーテル学院大学

- ② 滝口 真、高山直樹、他、キリスト教社会福祉の固有性に関する一考察、日本社会福祉学会九州部会第 49 回研究大会、2008 年 12 月、長崎国際大学
- ③ 滝口 真、高田理論における社会福祉内発的発展論における考察—キリスト教社会福祉の価値と思想の視点より—、日本福祉図書文献学会第 11 回全国大会、2008 年 10 月、長崎ウエスレヤン大学
- ④ 滝口 真、キリスト教社会福祉の独自性に関する一考察—日本キリスト教社会福祉学会員の意識の視点より—日本社会福祉実践理論学会第 25 回大会、2008 年 6 月、関西学院大学
- ⑤ 滝口 真、ソーシャルワークにおけるキリスト教福祉の意義—スピリチュアリティと援助観の視点—、日本キリスト教社会福祉学会第 48 回大会、2007 年 5 月、西南学院大学
- ⑥ 滝口 真、ソーシャルワークにおけるキリスト教援助思想に関する一考察、日本社会福祉学会第 54 回全国大会、2006 年 10 月、立教大学
- ⑦ 滝口 真、ソーシャルワークにおけるキリスト教福祉についての考察—対人援助における聖書解釈とインタビュー調査より—日本キリスト教社会福祉学会第 47 回大会、2006 年 7 月、和泉短期大学

〔図書〕（計 9 件）

- ① 滝口 真編著、他、法律文化社、『障害者福祉論—障害者に対する支援と障害者自立支援制度—』、2010、1-3、50-56、57-65、108-120、151-158、159-166
- ② 植戸貴子、滝口 真、他、みらい、『ソーシャルワークの基盤と専門職』、2010、29-47
- ③ 武田 丈、滝口 真、他、関西学院大学出版会、『社会福祉と内発的発展—高田真治の思想から学ぶ—』、2008、187-205
- ④ 北野清一、滝口 真、他、ミネルヴァ書房、『障害のある人の支援と社会福祉』、2008、117-133

〔産業財産権〕

- 出願状況（計 0 件）
- 取得状況（計 0 件）

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

滝口 真 (TAKIGUCHI MAKOTO)

西九州大学・健康福祉学部・教授

研究者番号：20258635

(2) 研究分担者 0 人

(3) 連携研究者 0 人